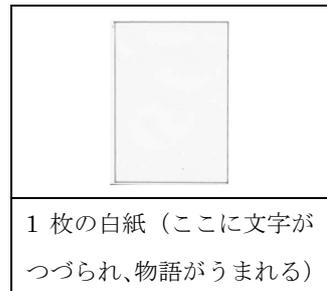


紙のうえに綴られる文字の物語

総合教育科 教授 吉田 芳弘

田辺の英雄弁慶が登場する、と言っても「なぎなた読み」のお話です。「弁慶が／長いなぎなたを持って」と読むところ、区切る場所を違えて「弁慶がな／がいな魏鉞（ぎなた）を持って」と読む「誤読」です。もちろん「がいな」は「驚くべき」という意味の和歌山弁ですが、「魏鉞」とは何でしょう？ 鉞（なた）は片手で扱う斧ですから、古代ゲルマンの戦士の武器と同じです。「魏」の字には鬼がありますから、魏鉞は恐ろしい武器なのかも知れません。文を読むときには、どこかに区切りを入れなければなりませんし、文字を連ねて紙に文を綴るときにも、どこかで区切って行を改めなければならないのは、文字で表される言葉の宿命です。文字が綴られる紙や石は「文字支持媒体 (vehicle)」と呼ばれます。英語「vehicle」は、日常単語では「乗り物」の意味ですが、三輪車や自動車あるいは宇宙船に乗ったときでは、気分も乗り心地も違いますし、そこで見る夢も違うはずです。

さて 20 世紀前半のドイツ文学を代表する作家フランツ・カフカは、執筆にはタイプライターを使わず、草稿類は必ずノートに手書きしていました。作家の長編小説草稿は大判のノート、掌編は極小型のノートに綴られているという事実の重要性に気付いたのは、英国のあるドイツ文学者の画期的な発見でした。私はこの事情を、たった 1 枚の小さな用紙の表裏に極小の文字で綴られている『最初の悩み』（岩波文庫『カフカ寓話集』所収）という掌編で再確認しようと試みました。手稿はドイツ語ですから、小さな紙のうえに左から右方向に横書きで文字が綴られ、右端まで来ると 1 行下がって左端から同じ作業を繰り返します。左右の移動を反復しながら、上から下へと下降してゆく文字の軌跡は、掌編の主人公である空中ブランコ芸人の、物語のなかでの居場所と動作に一致しています。手稿が用紙表頁下端から裏頁上端にかけて綴られている、すなわち物語を綴る文字が「文字支持媒体」を乗り換えなければならないとき、物語の内容は、新しい街のサーカスへの移動のために地上に降りてきた主人公が、新しいテントの最上段へと再び飛び移る場面なのです。紙のうえに綴られる文字の宿命は、そこに描かれている物語の主人公の運命なのです。そしてこのような事態を長編小説に仕立て上げているのは、19 世紀アメリカの作家 E・A・ポオの『ナンタケット島出身のアーサー・ゴードン・ピムの物語』（創元推理文庫『ポオ小説全集 2』所収）です。一見子供向けの海洋冒険譚には、実に大掛かりな知的遊戯が仕組まれているのです。



（『紀伊民報』平成二八年七月二六日）